

## 8 . 河道特性

斐伊川は起伏が穏やかな中国山地の船通山に端を発し、横田盆地をゆるやかに流れたのち、山間渓谷部を急流となって下り、谷が開けた中流部から堤防を有する区間となり、下流の広大な出雲平野に入ると天井川になる。その後、日本海との水位差がほとんどない汽水湖である宍道湖に流入したのち、大橋川、中海及び境水道を経て日本海へ注ぐ。

### ( 1 ) 上流部

上流部は、風化花崗岩が浸食され形成された横田盆地をゆるやかに流れたのち馬木川、阿井川などの支川を合わせながら、渓谷部を急流となって蛇行して流れる。ゆるやかに流れる横田盆地区間は護岸は整備されているものの高水敷はなく、河床は礫、砂からなっている。山間渓谷部は、川幅が狭く人頭大の礫が点在し急勾配で流下する。

### ( 2 ) 中流部

中流部は、やや開けた谷あいを緩やかに蛇行しながら流れ堤防を有する区間となってくる。河床勾配は約1/500程度、河床材料は粒径2.2～3.6mm程度の砂が多い。河道は高水敷がほとんどない単断面であり、河床には砂の堆積が目立つようになる。三刀屋川や赤川などの大きな支川が合流するが、河床が高いため合流部には大規模な導流堤を必要とする。伊萱床止めの直下流は流路が固定化し、河床の深掘れによる淵の形成が見られる。そこから下流は、流路が固定化せず常に変化しており目立った淵はないが、鉄穴流しが廃止された現在、土砂供給量が減少し河床が低下しつつある。



宍道湖流入点から22.0km付近

出典：出雲工事事務所所有 資料



宍道湖流入点から18.0km付近

出典：出雲工事事務所所有 資料

### (3) 下流部

下流部は、谷あいを抜け広大な出雲平野を宍道湖流入部まで流れる。

河床勾配は約1/880～1/1300程度と緩やかになり、砂の堆積がより一層進み典型的な天井川を形成している。河床材料は粒径1.4～1.9mmの砂である。流路は安定せず幾筋にも分かれ、独特のうろこ状の砂河床となっている。特に土砂の堆積が多い0～8kmは、掃流力を利用した土砂堆積対策として、昭和20年代に低水路を設けている。宍道湖流入部から約1.5km上流までの区間は、川幅が約400mと広く、宍道湖の背水の影響を受ける汽水域となっている。



宍道湖流入点から4.0km付近

出典：出雲工事事務所所有 資料

### (4) 宍道湖

湖面積79.1km<sup>2</sup>、湖岸延長約45kmの宍道湖は、水深が平均4.5mと比較的浅く湖底は盆型の形状をしている。

日本海との水位差が小さく洪水時の水はけが悪いため、藩政時代には佐陀川、天神川の開削等が行われたが、昭和47年7月洪水では松江市や出雲平野東部地域が7日間にわたって浸水するなど抜本的な解決にはいたっていない。



宍道湖を下流から臨む

出典：出雲工事事務所所有 資料

### (5) 大橋川

宍道湖から流出する唯一の天然河川である大橋川は、延長7.6km、平均川幅は120～130m、平均水深約5mであるが、河床勾配はなく、宍道湖と中海の水位差に流量が支配される河川である。

大橋川ほぼ全川にわたり無堤であり、低平地を流れ朝酌川などの多くの派川を合流させたあと、兩岸から山の迫った狭窄部を抜け中海に至る。



大橋川を上流から臨む

出典：出雲工事事務所所有 資料

(6) 中海、境水道

湖面積86.2km<sup>2</sup>の中海は、湖岸の延長が約81kmと長く水深も平均約5.4mとやや深い。中海は、延長8.7km、平均川幅約420m、水深約13mの境水道により、日本海と直接つながっているため、中海の水位は日本海水位に大きく影響を受ける。



境水道を河口から臨む

出典：出雲工事事務所所有 資料

図8-1に斐伊川と中国地方の主要な河川の縦断図を示す。

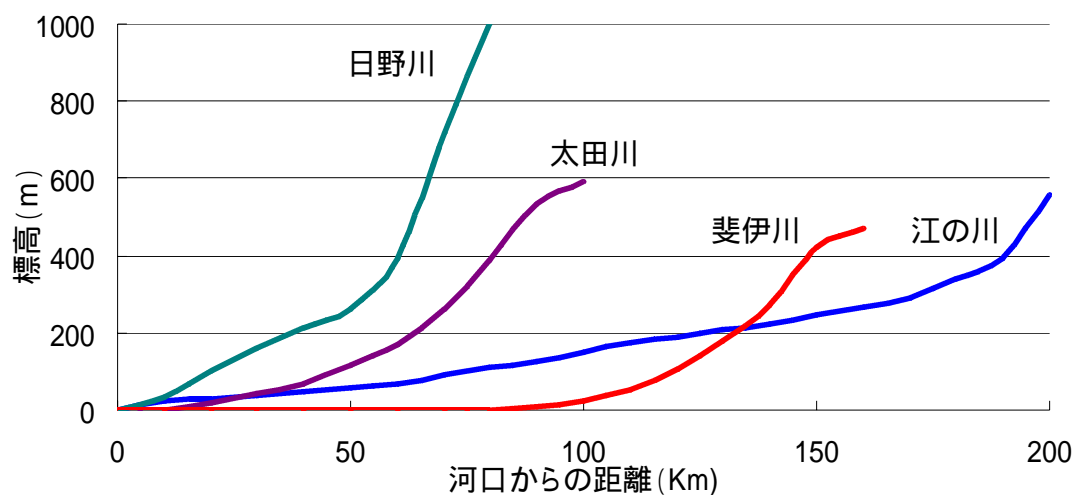


図8-1 斐伊川他河川縦断比較図

出典：出雲工事事務所作成